

レポート

神戸女学院 榊原美月

私が留学に興味を持ったきっかけはアメリカのスクールドラマでした。高校生の女の子の学校生活、友人関係、家族との生活とアメリカの学生の日常を描いたものです。自由でおおらかな雰囲気に魅了され体験したいと思うようになりました。

夢が叶いShadle Park High SchoolというPublic Schoolに6週間通いました。町はもちろん学校にもアメリカ独特の雰囲気がありました。一般的によくつかわれる表現ですが、開放的でおおらかで気さくでした。廊下などですれ違った時は必ず“Hi!”と声をかけます。また時には知らない人からも話しかけられたりしました。すれ違う時に“I love your outfit”などと服装や持ち物を褒めてくれることもたびたびありました。声をかけられることや、“Hi!”と挨拶をする友達が日を追うごとに増えていくことが嬉しくて、自分からもたくさん話しかけるようになりました。気が付けばその雰囲気に溶け込んでいました。

授業を通して感じたことは、単に先生の話聞き板書をするという方法では参加できないことです。常に自分の考えを持ち、それを常に伝えようとする前向きな姿勢がなければほかの生徒と意見交換ができず授業についていけません。アメリカの生徒は日本人に比べ積極的に発言しています。そのため私も、受け身でいるのではなく自分の考えを積極的に伝えようと頑張りました。様々な考えを持った人との授業は刺激的でした。また友達をたくさん作るために授業以外にもクラスメイトに話しかけるよう心掛けました。英語を通じてできた友情は何にも代えがたいものがあります。この6週間で英語を話すことに自信を持てるようになりました。

スポーケンの町並みはとてもきれいでした。紅葉した木々や青々とした芝生が茂る庭が広がり、広い家が立ち並ぶ。高い建物はなく、見上げると空が広がる。夜には満天の星空が見えました。野生のリスや野ウサギが家の周りにいたこともあります。開放的で美しい風景を眺めていると、心が穏やかになりがんばろうという元気が湧いてきました。

放課後は真っ直ぐ家に帰る生徒がほとんどでした。家に帰り宿題をし、家族そろって晩御飯を食べその後ゲームなどをして家族団欒の時間を過ごす。そのおかげかスポーケンでの1日はゆっくりと過ぎていきました。日本では部活や行事の準備などで6時7時に帰宅するあわただしい生活を送っている私には新鮮でした。

ホストファミリーはとても温かく親切で「したいことや必要なものがあったら何でも言ってね」と愛情をもって迎え入れてくれました。私はMomやDadと呼び、買い物に行ったり、公園で遊んだり、本当の家族のように過ごしました。休日にはいろいろな所に連れていってくれたたくさんの思い出ができました。また、Momの日本人の友達であるYukiさんとの出

会いも忘れられない思い出です。帰国が近づくにつれ悲しい気持ちが強くなっていきました。Momは私に「空港までの道中で道に迷って飛行機に乗り遅れよう」と言い、私はその優しい気持ちが嬉しくて泣きそうになりました。

出発前、「日本のことを伝え、アメリカで学んできたことを伝える」ことが私の役目だと思っていました。最後の授業の日、日本語クラスの先生が「みんなにとって日本がすごく近い存在になった。帰国後アメリカでの話をすれば日本のみんなにとってもアメリカが近い存在になる。あなたは日本とアメリカの架け橋だ」と言ってくれ、出発前に考えていた目標に近づけたのではないかと思い嬉しくなりました。そんな私であり続けること、それが私の夢になりました。豊かなSpokaneで様々なことを感じ、また学びの場を与えてくれたすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

